

日本観光研究学会賞受賞  
『大覚寺大沢池景観修復プロジェクト』 61  
—古代と現代を結ぶ文化遺産—

Daikakuji Osawa-no-Ike Landscape Restoration Project

— Wisdom of Pond Founders recognized in the Current Generation through Managing  
and Restoring the Natural and Cultural Heritage —

海津 ゆりえ\*

Yurie KAIZU

編：真板昭夫・河原司

著：真板昭夫・海津ゆりえ・小沼康子・河原  
司 他

発行：世界思想社

年：2009年12月

大覚寺は京都の西部、嵯峨野の観光名所を代表する文化遺産であり、その中核は庭園の中央を占める周囲約800mの大沢池である。大沢池は奈良時代の築造であるが、平安時代に嵯峨天皇が離宮嵯峨院の造営にあたって中国の洞庭湖を模して改造せられたとされ、現存する日本最古の林泉と伝えられている。

本著作は、この池に繁茂し、毎年観光客を楽しませてきたハス、スイレン、ヒシなどの水草が、ある時忽然と姿を消した、というミステリーじみたエピソードから始まる。程なく、その原因は大覚寺による「水草除去」のために放されたソウギョ1000頭であることが暴露されるのだが、本書は、それが原因で大きく損なわれてしまった池および周辺の自然環境を、造園・社会調査・生態学・測量・植物・美術など多様な分野の専門家と学生によって結成されたプロ集団「ソウギョバスターズ」が復元していく過程をドキュメンタリーとしてたどってゆく。ソウギョバスターズは、編者の一人・真板昭夫氏が、大沢池畔の茶室「望雲亭」で大覚寺門跡からこ

の逸話を聞いた2000年に始まっている。植物生態学者でもある真板氏の号令の下に集まった、東京・大阪・京都の専門家による調査チーム「ソウギョバスターズ」は、社会調査、植生調査、測量、造園設計、利用動線計画、土壌改良計画、池面の植栽デザインなど多方面にわたる調査・計画立案を行い、学生や市民と共に次々実践を展開していった。大物釣り集団「ワンハンドレッドクラブ」と保津川漁協の協力でソウギョの一網打尽を無事敢行し、2007年には水草は復活したが、それ以後も予期せぬ事態が常時発生し続け、今なお活動は継続中である。関わった人員はのべ2000人を超えた。

だが本書が伝えたいのは面白おかしいプロジェクト談ではない。これまであまり重要視されて来なかった「観光資源である文化遺産を持続的に保全・継承していくにはどうすればよいのか」、という重いテーマなのである。そのためには資源管理の仕組みづくりはもちろんのことだが、それだけではなく、6つのポイント（権威性・伝承性・文化性・生産性・主体の多様性・法的担保性）が必要であり、そもそもの資源性を再確認する上で「宝探し」の視点が重要であるというのが本書の結論である。このことは文化遺産だけでなく、現代の観光資源にも当てはまる普遍的なモデルといえよう。

\* 文教大学湘南総合研究所研究員・文教大学国際学部准教授